

創
品
Creation

過疎化、少子高齢化が進む竹田市で、Uターン組を中心にまちおこしの新しいムーブメントが巻き起こっている。古里を愛し、現状をプラスに捉えてさまざまな活動を展開している4人の若手リーダーたちが、これからの竹田市をどう創造していくかについて話し合った。鍵を握るのはまちなかの活性化。

時代や役所のせいにはせず挑戦

精神的なものの創造する

中野 テーマは「創品」。クリエートを意味する「創る」をあえて当てているところに、物質的なものではなく精神的なものを創造する意味が込められていると思います。皆さんの活動を通じて、そこから生み出されるまちづくりにつながる活力や、新しい竹田のムーブメントについて話したい。皆さんは竹田市で生まれ育ち、一度は市外に出て戻ってきていますが、現在に至った経緯や竹田の魅力について聞かせてください。

草刈 10代後半まで竹田にいて、大分市の看板店で修業を始めました。仕事柄書道始めた時、竹田の看板の文字が、いいと思い始めて、ちょくちょく竹田に帰るようになりました。20代後半で竹田で就職しましたが、大分で伸び伸びしていた分、竹田では知り合いの目が気になって自由にできない自分がいて、ストレスで入院しました。三十四、五歳で独立しましたが、仕事が全くありませんでした。まずは自分ができるところをしようと川の石を拾って字や絵を描いて岡城で並べていると、それが売れるようになりました。何かアクションを起こしたらそれを受け入れてくれる人があるということに気付くと、いろんなことが楽しくなりました。空間のプロデュースをやってみなにかと言われ、経験がなかったけど自分なりに清水湯の改装をやってみて、そういう仕事も多くなっています。

甲斐 竹田高校を卒業し、京都の大学を出て、東京の企業に3年勤めて28歳で帰ってきました。実家が商売をしていたので「いずれ帰ってこないといけない」という感覚はありましたが、竹田はしがらみが多くて人のつながりも狭く、あまりいいまちだと思っていませんでした。ただ、帰ってきて商売を始め、

商工会議所で若い人たちと話し合う中で、竹田の良さがだんだん分かってきました。過疎や高齢化、少子化などについて「時代が悪い」「市役所が悪い」という人もいますが、やり方次第ではもっともっと面白みが出るし、他にないものがある、というのが竹田だと思います。

氏田 竹田商売を卒業し、フリーターをしたり専門学校に行ったりしましたが、「これは違う」と思ってたが、これって実家に戻っていいなと思って、もう一度外に出よう」と福岡に出て働き始めたのが、もつ鍋のお店です。そこは年齢に関係なくやる気のある人間を引っ張り上げてくれる会社で、21歳で店長を任せられ、25歳でその会社の完全子会社の店舗を委託され、コンサル事業をやっていました。独立しようとして仕事を辞めて福岡に出店する準備を始めてから、竹田にもちょくちょく帰るようになっていきました。週末の午後8時ぐらいに飲みに出た時、駅前通りの真暗でどの店も開いてない状態だったのを見て「これはまずい」と思いました。そこで、若い人を集めて竹田を元気にしようという趣旨の会をつくり、月1回集まってわいわい飲んでいううちに、気持ちかぶれ始めたんです。福岡で店を出す方が商売的に間違いないのは分かってたけど、自分の中では「このまま竹田を捨てていいのかわ。竹田でやりたい」という思いが強く、悩んだ末に竹田にもつ鍋店を出しました。

どうしがらみ打破する

中野 藤原屋さんは老舗ですが、伝統を守りながら新しいものに取り組んでいますね。

甲斐 私たちの商売は時代や環境に応じて変わっています。江戸時代はろうそく店をやっていたんですが、今は鳥や豚を飼って卵を販売してい

ます。正直、本業に対するこだわりはありません。私も社員も、いいものがあつたらまずはやってみる、チャレンジするということを常に意識しています。大事ななのは自分の会社が生き残ること。私は、企業は雇用だと思っています。雇用があつて初めて生活ができ、地域が確立されていくと思います。

中野 竹田支局勤務時代は同世代のプラステーションを感じました。しがらみなどを打破するためにどうすればいいかを考えていく必要があると思います。

甲斐 竹田には、妙にまとまり足並みをそろえたりすることを善とする傾向がある気がします。伝統やしきたりも妙に強い。でも今は時代も来る人も好みも違います。いいものは残すという基本は押さえながらも、「若い人がしたいならやらせてみよう」という懐の深さもあると思います。

草刈 若い人が事業をを起こす時、それにふたをしようとする、という人もいます。素直に尊敬する気持ちになってほしい。何かを一直線に頑張っている人には自由によつてもらって、それを見て周りが勉強すればいい。

まずは、まちなかから

志賀 頑張っている企業が伸びていくのはいいけど、行政としては全体でよくなってほしい。そこにどういふことが必要かをよく考えます。全体的にみて、一番頑張らないといけないのは竹田のまちなか。駅に到着した観光客はそこから歩き始めるので、まずは駅前の辺りがちゃんとなっていることが大切ではないかと思っています。

草刈 最終的には地域の人でしょう。以前、安岐町のおばあちゃんがやっているおいしいちゃんぽん屋さんは何回も通ったことがありました。

それを考えると、人を呼ぶのはそんなに難しいことではないんじゃないかと思うんです。ちゃんとしたものをつつ提供することがキープポイント。「岡城がある」とか「この季節は桜がきれいだ」とかいふのはいいんですけど、言いたいことを言い合つてまちおこしを考えていきましょう。今、市の企画情報課は結構頑張つてくれています。市と市民が近くになっている気がするので、今がチャンスだと思います。

甲斐 僕は、まちなかは人が集まる場所になればいいと思います。氏田さんのようなお店を増やすため、やる気がある人がまちなかに起業しやすいよう行政もフォローした方がいいと思います。

物件情報HPで紹介を

中野 起業するにはどんな支援があるのでしょうか。

氏田 一番は物件です。「竹田市の中でどこが空いていて、家賃はこれぐらいでこういう設備があつて、こういう業種に適しているのでしょうか」などがHPで分かりやすく見られるといいですね。今の竹田の空き家数で店をやるとなると、かなりの初期投資が掛かります。ある程度、市が形をつくつてくれたらすごく一歩が出やすい。

中野 これまで行政側はどういう支援をしてきましたか。

志賀 3年前、企画情報課内の農村回帰推進室を中心に農村回帰支援センターを設立して、移住者の相談窓口を一本化し、移住を希望している人はここに来れば情報が得られるという形になりました。空き家の案内や就農、起業の相談も受けて、起業する場合は掛かった費用の上限100万円までを補助しています。利用者は多いですが、物的な支援にな

るとあまりできていないですね。具体的にニーズを詰めて、補助の内容を変えていかないとけないという気がします。起業後もきめ細かくフォローしていければいいのですが、そうだと商工会議所の組織でやっていくようになるので、なかなか市が手を出せない部分があります。商工会議所との兼ね合いが難しいですね。

行政との役割分担必要

中野 三浦さん、成功するのはどんな企業でしょうか。

三浦 皆さんは自分が掲げた理念を事業に移して成功していますが、理念から経営の戦略、戦術までが一貫している会社はうまくいく典型です。まちおこしも同じように、まちなかのシャッター街をどうしていきたいかという声をまず商工会議所でまとめて、市に要請して、行政と民間と市民が三位一体で「こういうふうに行きたい」というビジョンを決めて、その後で具体的に「ここまでは市がします、これ以上は商工会議所をお願いします」などと役割分担をしてやっていくと実現するのではないのでしょうか。

志賀 役割分担ができていないという雰囲気は何となく感じます。人のつながりをつくっていったらうまく転がっていくのかもしれない。

氏田 やる気がある人間を支援して伸ばして、そういう人たちがくついで市をよくしていければいいと思います。竹田全体がよくなっていくので、やる気がなかった人たちも必ずよくなっていくと思います。

若い人たちの動き魅力

中野 あらためて、竹田の魅力は何でしょう。

草刈 魅力は今からどんどん出てくると思います。現時点での魅力は若い人たちの動き。「次は何をしよう」とか「来年はこういう仕掛けをしていこう」とか、今からまちをつくっていくとする人たちの動きが見えてきて楽しいです。わくわくします。本当の魅力はその先に見えてくるんじゃないでしょうか。

甲斐 私たちの事業からすれば、自然が豊かな竹田で鶏や豚を飼って生産活動をしていると、相手のパイヤーに商品の良さを伝えやすいですね。イメージのある土地は絶対的に強い、実際に来て、見て、感動してもらつて「ここならいいね、安心安全だね」と思ってもらえる。竹田には非常に地理的なアドバンテージがあります。

氏田 僕もすごく魅力のあるまちだと思います。若者が少ないのは僕にとってはチャンス。若いライバルが周りにいませんから。プッシュしてくれる人もいます。店では竹田産の食材を使っていますが、「こんなにいいものがありますよ」と言えるのも竹田の魅力。僕らが「僕たちは竹田で生まれ育つて竹田を元気にしたいんです。だから竹田産の物を店を出しています」と伝えれば、お客さんも「これおいしいね、今度竹田に行ってみよう」と思ってくれるようになります。そこに僕らもやりがいを感じています。

志賀 そういう動きはうれしいですね。4年前に竹田に帰ってきたとき、「いつかはまた外に出たい」という気持ちがありました。でも仕事をする中で人とのつながりが少しずつ出てきて、竹田にも諦めていない若い人がいっぱいいることを知つて、その中で私にもできることがある、必要とされているといううれしさを感じるようになりました。竹田の魅力は1回では伝えきれません。歴史もかめばかむほど味が出てきます。だから、

どんどんお客さんに来てほしいというよりも、いいところを分かつてくれる人に何回も来てほしいと思っています。

旧1市3町がバラバラ

三浦 客観的に見て竹田は、合併した1市3町それぞれの魅力が強い。それが今のところ一つにまとまりきれていません。必ずしもまとめる必要があるとは思いませんが、どうせ人を呼ぶなら、竹田の旧市街地に魅力を感じている人が久住や直入にも行ってみようという気になるように、回遊性をつくっていくのも重要です。それをまとめるのが市役所の役目だと思います。

志賀 どちらかといえば久住は久住、直入は直入みたいな雰囲気はまだ感じます。旧町同士でどうしてもお互いに別の意識があるようです。

三浦 情報発信も分散してしまっていますね。いろいろあるのに、その魅力が単体の魅力でしかなくなってしまっています。ポテンシャルがものすごくある土地なので、それをまとめるリーダーが現れると非常に面白い方向に行くでしょう。

草刈 岡城、高原、温泉があるのはすごいこと。だけど竹田の人はそれに順つてしまつて、これまでいろんな展開ができていってませんでした。竹田には小さな魅力もいっぱいあります。「わびさび」があります。路地とか、そういう何でもないところにポイントを絞つて、みんなで魅力を築いていってはどうでしょう。個人にスポットを当てると、ちょっと視点を変えてみるのもいいと思います。

甲斐 今まで竹田は、外から来た人にお金を落とすほどの所じゃないと思われていたのではないのでしょうか。だからビジネスにならないし、産業にならない。今の人は感動したものににお金を落とします。お金を使う人の気持ちをつかなくていいことが大切です。突き詰めていくとストーリー性なんです。それをもつといろんな人に気付いてほしい。

草刈 今、高校生がよくあいさつをするようになってますね。大人も、一人一人が心から気持ちよくあいさつできるようになったら、それがまちの魅力につながります。

空気感をつくっていく

中野 竹田にはまだくすぶっている人たちがいると思います。Uターンして頑張っている人たちが起こしているこのムーブメントを加速させるにはどうすればいいのでしょうか。

氏田 僕にできることは竹田に出店して雇用を生んで、その仲間に僕の思いや会社の理念を伝えて、「竹田を元気にしようよ」ということを一つの柱に置いて頑張っていくことだけです。

草刈 それぞれがレベルアップして、それに食いついていこうとする仲間が増えてくると全体的にレベルが上がると思います。

甲斐 そこに年齢は関係ないですね。動きについていけないという人も、いいものは一緒に取って取り入れていくという素直さがあればいい。成功している人のまねをするのもいいと思います。

中野 伝統を守つつも、客観的にいいなと思ったものは受け入れて、その中で新しい動きというか、特色や雰囲気をつくっていくのが今後のあるべき姿だということでしょうか。

草刈 目に見えないところのまちおこしは、たぶん空気感をつくっていくことだと思います。何をつくつたらいい、どうしたらいいではなく、空気をよくするというでしよう。

スポーツは
育てることができる。

子どもをひとり育てるには、約3000万円かかると言われていますが、

スポーツを育てるにもやはりお金がかかります。

選手や指導者の育成、グラウンドの芝生化、地域のスポーツ施設の整備。

そんな日本のスポーツ振興に役立てられているのが、totoとBIGの収益です。

買う人が、知らないうちに、日本のスポーツの育ての親になる。

「なんかいいっすね」香川選手はそう言って屈託なく笑うのでした。

